

# 図書館報

宮城高等学校 図書部  
編集 仙石玉祥 印刷 中村印刷

## 『読書考』

校長 本郷 貴志



### 1. 原作かドラマか

テレビの『陸王』が面白い。『半沢直樹』や『下町ロケット』同様、なかなか楽しめる。

こういった場合、「原作が先か、ドラマ・映画が先か」悩む人を耳にすることがある。

「映画を見てから原作を読めば、登場人物の表情、アクション、車などの小道具まで、文章を読みながら、まざまざと脳裏に映し出されて楽しめる」という人もいるし、文章から想像力を喚起したい人には「映画のイメージが邪魔してしまう」ということにもなる。

また、読むのが好きか、観るのが好きかという嗜好でも変わるようだが、先に出会った媒体が基準になるなら、作品との出会い方も結構大事ということである。

私は、「原作が先」である。ドラマや映画では、監督の感性がものをいう。監督により、作品のポイントもはしより方も変わり、与えるインパクトそのものが変わる。

私は、想像力をかき立ててくれる原作から入る方が好きだが、ストーリーに引張られていく方がよい人には、ドラマなどから入る方がよいかもしれない。大抵の場合、原作の方が映画などより作品としては上だと考えるが、数少ない例外として、松本清張の映画『砂の器』を挙げたい。観てからかなり時間がたった今でも、あのエンディングの重厚な音楽と場面は今でも鮮明に呼び戻すことができる。

### 2. 旅と読書

旅の「思い出」といわれるが、どんな旅行でも「思い出」ができるわけでもなく、「楽しい旅でも、戻ってしばらくすれば、宿から食事まですっかり忘れてしまう」こともざら。

読書も似ている。「面白い」と思った物語も読み終えてしばらくすれば、主人公の名やストーリーは忘却の彼方へ、ということもある。あげくには、読んだことまで忘れ、同じ本を借りたり買ったたりすることまである。思わず「読書の意味って何」と口にしようになることもままある。とはいえ、いざれにしても、やめられないのが旅と読書であり、思うに、似ているものが旅と読書であるということか。

ともに、「何かと出会う。人生が変わる」といえればかっこいいが、過剰な期待であると感じることもある。新入生に「出会いを大切に」ということで、書物等との出会いに触れたが、人生に大きな影響

響を与えるほどの出会いがそう容易にはないのも事実である。

しかし、だからこそ、「出会いたい・出会ってほしい」と強く念じるのだが、やみくもに旅や読書等をするだけではえられないのではない。それでも、日々の生活を大切にすることで出会いを求めるといえる。偶然の出会いを待つよりも、良質なものと出会う確率ははるかに高いはずである。

### 3. 推理小説

旅の「思い出」といえば、「推理小説」である。

大学生になって、推理小説に覚醒してしまった。小学生の頃、江戸川乱歩の『怪人二十面相』などを読んだが、なんと読むのを忘れていた。大学の最寄り駅までの電車で、毎日時間つぶしに読書したのだが、中でも、特に読んだのが松本清張だった。

一人で旅に出たとある日にとある県庁所在地で出会った地元的大学生たちと意気投合し、彼らの大学の推理小説同好会なるサークルに入会することとなった。その頃には、清張、乱歩だけでなく西村京太郎、横溝正史、赤川次郎なども読むようになっていたが、同好会を名乗るだけあって彼ら知識は、私のそれとはまるで比ではなかった。お陰

で国内作品から海外作品まで、読む範囲が広がった。江戸川乱歩の筆名の由来であるエドガー・アラン・ポーからエラリー・クイーン、コナン・ドイルなどでも読むようになっていった。今でも、そのサークルの中の一人とは親交を結んでいるが、会えば、昔話に花が咲く。

### 4. むすびに

いろいろな場所を訪ねてみればよい。お金はかかるが、きつと自分の世界が広がるはず。

いろいろな本を読んでみればよい。偏ったジャンルだけでは、自分の世界は広がりはない。楽に読めるものだけでなく、苦勞しないと読めないものもたくさん読むのがよい。苦勞して読めば、その苦勞に比例して、自分にエネルギーがみなぎるはずである。

旅と読書が、皆さんの人生を少しでも深みのあるものにしてくれればと祈りつつ、脱稿したい。



『陸王』池井戸潤 集英社